



Title	Pragmatic Teaching and Japanese EFL Learners ' Use of Greeting Routines [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	ZEFF, BERT BRICKLIN
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第13188号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70646
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Bert_Bricklin_Zeff_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア） 氏名：ゼフ・ブリックリン

学位論文題名

Pragmatic Teaching and Japanese EFL Learners' Use of Greeting Routines

（語用論的指導と日本人 EFL 学習者の挨拶ルーティンの使用）

本論文は、挨拶を、事実を述べる手段としての言語ではなく、発話自体が何かの行為を意味する言語行為（スピーチアクト）の1つとしてとらえ、その語用論的指導を日本の大学生の英語教育に取り入れることで、学習者の英語による挨拶場面での言語運用に変化があるか否かを検証した報告である。論文は8章と参考文献、ならびに6つの付録から構成されている。第1章では導入として、研究の背景と目的、意義、論文の構成が説明されている。第2章では、先行研究のまとめとして、語用論的知識の指導を第2言語教育で行う重要性を議論している。第3章では研究デザインの説明として研究課題、方法論、本研究の独自性の説明がなされている。第4章はパイロット・スタディの報告、第5章では本調査の報告が行われている。第6章では調査結果が提示され、第7章ではパイロット・スタディおよび本調査を通して全体的な分析が示されるとともに、教育的な示唆として挨拶の語用論的な指導を効果的に行う方法が提言されている。第8章では、本研究の限界が指摘されるとともに、今後の研究への示唆が記述されている。

著者は、日本の大学における英語学習者は、通常6年間の外国語としての英語（EFL）教育を受けてきており、そこでは、暗記、文法練習、限定されたパターンの言語表現の体験が主な学習経験となっているとともに、学習指導はしばしば、語彙や文法、コミュニケーション方略を導入する教科書に依存していると指摘する。日本の英語教育における問題は、長期にわたる学習の後も英語でうまくコミュニケーションができないという点に集約される。コミュニカティブ・ランゲージ・ティーチング（CLT）は、Krashen のモニターモデル、学習方略、教室場面での外国語教育の役割などについての第2言語習得理論にもとづいた、EFL 教育の方法として探求されてきている。近年、日本の英語教育では、中学高校において CLT を用いて学習体験を豊かにしようとする傾向が見られ、また、文部科学省は学習指導要領のなかで、コミュニケーション能力の育成に必要な言語使用場面や言語の働きを、多くの例をあげて示している。しかしながら、CLT に関する研究では状況の改善が示されているとは言い難いと著者は主張する。著者は、CLT の方法論に沿った語用

論規則の指導と総合的な評価は、学習経験を豊かにし、外国語としての英語教育を大きく改善するという立場に立っている。

日本人英語学習者の語用論的能力の育成に関する先行研究では、明示的な語用論指導の必要性が明らかになってきているが、挨拶をスピーチアクトとしてとらえ、研究対象としたものはまだ存在しない。著者は、第2言語教育において挨拶は初期の段階で必ず触れられる言語項目であり、その指導法の改善は第2言語教育全体への影響が大きいとして、その重要性を主張している。また、著者自身が行った調査で、日本人英語学習者の英語での挨拶行為に何らかの問題を感じている外国人英語教師が多かったという。さらに、先行研究では空欄補充や談話完成などの方法によるデータ収集が多く用いられ、じっさいのコミュニケーション場面における学習者の言語運用を分析した研究は少ないと著者は指摘する。これらの先行研究の概観を踏まえたうえで、本研究には、語用論的能力を高める指導方法や学習者の語用論的能力の評価方法の開発も研究の対象に含まれている。

調査では、実験群には語用論的指導を明示的に行うグループと非明示的に行うグループを設けたのに対し、統制群では教科書の解説を中心に授業が実施された。一般的な挨拶習慣や異なる場面での挨拶表現の適切さを判断する設問を含むコンピュータを用いた事前テスト、事後テスト、遅延テストが実施された。また、学習者に対して質問紙により、第2言語によるコミュニケーションでの挨拶の違いや重要性への気づきが調査された。さらに、模擬的現実場面での言語運用を評価するため、学習者は挨拶行為が期待される場面へと誘導され、英語によるコミュニケーションを行った。具体的には、日本人英語学習者2人がある部屋に行くように指示され、入室すると英語母語話者がそこにいるという状況が設定された。英語母語話者は自分からは発話しないように指示されており、日本人英語学習者のそこでの言語運用の様子が録画され、分析された。

収集されたデータは、日本のEFL教育における語用論的指導と評価の役割を理解するために有用であると著者は主張する。コンピュータテストによるデータを用いた実験群と統制群の比較では、語用論的指導を行ったグループの優位性を示す傾向は見られたが、統計的に有意な証拠は得られず、結果は断定できなかった。しかし、模擬的現実場面での学習者の言語運用を分析することで、著者は挨拶行為を実行するうえで影響を与える要因の特定を試みている。その結果、一連の挨拶行為のなかでマイクロ・グリーティングと著者が名付けた構成要素が日本の英語学習者にとっての困難点になっていると指摘している。具体的には、日本語での挨拶では場面に応じて黙礼により挨拶の最小単位（マイクロ・グリーティング）が満たされるが、英語での挨拶ではこれが許容されずに期待された発話が行われないうちに失礼と受け取られると著者は考察する。パイロット・スタディおよび本調査を通じて、この違いが日本人英語学習者の英語による挨拶行為における語用論的発達の上で影響していると主張する。

コミュニケーション能力の高い第2言語話者は、目標言語での挨拶を適切に行う能力を有するべきであると著者は主張する。この技能がなければ、その言語でコミュニケーションが有能に行えるように評価されることは難しいという。本論文では、

こうした立場に立ったデータ分析の結果が示され、語用論指導とスピーチアクト理論が第2言語教育の主要な目的にいかに関係するかが議論されている。さらに、アメリカ英語の挨拶場面における言語運用能力の理解を促進するために、模擬的現実場面での評価方略が開発され、また、挨拶のスピーチアクトの指導に用いられるタスクが改善されたと著者は主張している。